

二つの国で学んだ大切なこと

中 三

僕はイギリスで生まれました。母は日本人、父はポーランド人です。二人はイギリスで出会い、結婚しました。僕が生まれたイギリスは、昔から移民の国であり、町中の店の店員さんや学校の友達、先生などには、様々な国の人がいました。

僕が通っていた小学校には、ソマリア人、インド人、バングラデシュ人などいろいろな人たちがいて、いろいろな宗教の人がいました。毎日楽しく学校生活を送っていましたが、時々トラブルもありました。

学校では、ランチタイムになると、大きな食堂で昼ご飯を食べていました。僕は毎日、弁当を持って行って食べていました。弁当の中身はいつも決まっておにぎりとヨーグルト、りんごでした。おにぎりを食べる人は僕の他にはいなかったのです。「それ何。初めて見る。おいしいの。」とよく人に聞かれました。「これは日本食だ。」

といくら説明しても、彼らは分かってくれませんでした。だから、なるべく距離を保って食べるようにしました。

食堂には学食メニューがあり、時々それを食べていました。友達の中には、宗教上のルールで、食べてはいけない食材を残している人もいました。当時の僕は、「食べられる物が限られていてかわいそうだなあ。」と思っていました。

ある日の休み時間のことです。僕は校庭で友達と一緒に遊んでいました。その日はかなり強い風が吹いていたので、イスラム教徒の女の子が頭に巻いていた布が風で飛ばされてしまったのです。僕はたまたまそれを見ていました。すると、その女の子は、

「あなたは私の髪を見た。このことを先生に言う。」

と言いました。僕は先生に呼び出され、叱られました。「自分は何も悪くないのに。」と思いました。でも、その子にとっては、髪を見られることが、とても恥ずかしくて嫌なことなのだと分かりました。

また学校では、イースターやクリスマスになる

と、毎年必ず近くの教会に行きました。教会はキリスト教の教会なので、違う宗教の友達は行きません。そのとき僕は、友達に向かつて、

「どうして僕たちと一緒に教会に行かないの。面倒くさいんでしょ。」

と責めてしまいました。今思うと、ひどいことを言ってしまったと思います。

ある日、僕は家族で町に出かけようと、バスに乗りました。町の中心部に近づくにつれ、乗客も増え、バスの中はすし詰め状態になりました。こんなとき、運転士さんは乗ってくる人に対して、「人が多過ぎて乗せられないよ。」

とすることがあります。そのときも、やはり運転士さんは、

「ごめん。今は乗せられない。」

と一人の男性に言いました。その人はたまたま黒人の男性だったのですが、

「僕が黒人だから乗せないのか。」

と怒り出し、叫びました。しかし、運転士さんは決して悪気があって言ったわけではないと僕は思いました。怒った男性は、きつと過去に何度も、黒人だからという理由で差別されたことがあった

のでしよう。実際に僕も、黒人女性がバスの中で、他の乗客に無視される差別を受ける場面を見たことがあります。

僕は小学校三年の一学期までイギリスに住んでいましたが、二学期からは日本に住むことになりました。日本での初めての学校生活はとても大変でした。僕が日本人とは考え方が違い、言葉も変だということ、冷たい目を向けられたり、あからさまに差別されたりしたこともありました。つらい時期もありましたが、先生方や母の励ましと手助けのおかげで、だんだんと学校は楽しいと思えるようになっていきました。

このような様々な経験から、僕は、人一倍人権に敏感になったように思います。電車に乗ると、優先席に若者や健康そうな人が座っている光景をよく見ます。また、目の前に、お年寄りや赤ちゃんを抱いたお母さんがいても座り続ける人もいます。そんなとき、「僕だったらすぐに席を譲るのに。」と悲しい気持ちになります。また、町で障害のある人を見かけることがあるのですが、一緒にいる友達が笑ったり、小声で悪口を言ったりすると、とても嫌な気持ちになります。

僕は、自分がイギリスで生まれ育ったことで、とてもいい経験ができたと思っています。いろいろな人がいて、いろいろな考え方があって、当たり前前と思えるようになったからです。だから、僕は初めて会った人とも、すぐに心を開いて話すことができ、仲よくなれるのです。一方、僕自身が差別される経験を通して、人の痛みが分かるようになり、本当の優しさをもてるようになりました。これから先、僕は、たくさんの人と出会いたいのです。そして、誰もが平等で尊重される世界を創る架け橋になりたいです。皆が笑顔で過ごせる社会が実現されることを信じて。